

環境運動における戦略的パートナーリズムの可能性

——韓国大邱市三徳洞のマウルづくりを事例として——

松井 理恵

(筑波大学大学院)

環境運動が地域づくりという文脈で展開されるという近年の傾向を受け、地域の環境を創造する際、環境運動を含めた諸主体が「ともに」かかわるべきである、という認識が一般化した。その結果、地域の環境をめぐる諸主体間の関係が、環境運動におけるひとつの課題となったのである。

本稿が事例とするのは、韓国大邱市三徳洞でおこなわれている、住民主導の地域づくり、マウルづくりである。この運動を先導する市民運動家 K さんは、三徳洞の住民と「ともに」マウルづくりを展開しようとしたにもかかわらず、住民は彼に背を向けた。つまり、K さんの目論見は外れたのである。この背景には、運動が必然的に内包するパートナーリズムの問題が存在する。すなわち、環境運動を担う NGO と住民との力関係の露呈が、運動の失敗の原因であったのである。

運動の限界に直面した K さんは、みずからがマウルづくりの表舞台から身を引くことによって、この限界を打開しようとした。つまり、運動のパートナーリズムを乗り越えるために、パートナーリズムを相対化したうえで戦略的に利用したのである。本稿では、K さんのこの試みを「戦略的パートナーリズム」と呼ぶ。話し合いのみでは乗り越えられないような、さまざまな問題を抱える地域社会で運動を展開せざるをえない数々の環境運動に対して、この「戦略的パートナーリズム」は、ひとつの有効な視座を提供できるのではないだろうか。

キーワード：環境運動、諸主体間の協働、戦略的パートナーリズム

1. 問題意識

近年、地域づくりという文脈において、さまざまな環境運動が展開されている。たとえば、公害などによる生活環境の著しい悪化を受けるなかで、自分たちは本来どのような環境を望んでいるのか、という視点を強く打ち出した環境運動が見受けられるようになった。全国各地で展開されている歴史的環境保全運動も、まさにこの視点、自分たちはどのような環境を望んでいるのか、にもとづいた環境運動であろう。こうした動向のなかで、環境運動はその運動の内実を転換しつつあるようにみえる。すなわち、「『たたかう』運動から『つくる』運動へ」（今西，1998），あるいは、「対決的姿勢からパートナーシップへ」（高田，2001：116）という環境運動の質的な変化からもわかるように、地域の環境には、諸主体が「ともに」かかわっていかなければならない、という認識が普及したのである。地域の豊かさをつくりあげるには行政だけでは限界があるとの認識のもと、それまで地域づくりを独占的に担ってきた行政の側が、地域づくりの担い手として地域住民に焦点を当て、「住民参加」や「住民との協働」を必要とするようになったことも（鳥

越, 1997 : 110-13), こうした環境運動の質的な変化と関連しているといえよう。

このような動向のなかで、環境運動はあるひとつの課題に直面することになった。それは、諸主体が「ともに」地域の環境を創造していくためには、いったいどのようにすればよいのか、という課題である。言い換えれば、環境運動の現場では、この「ともに」の内実が検討されなければならないようになったのである。本稿ではまず、地域の環境にかかわる諸主体がどのように合意を形成するに至り、そしてどのように環境問題の解決を導くことができるのかを検討してきた環境社会学の蓄積にもとづき、この課題に向き合う際、着目しなければならない点を明らかにする。

具体的に事例として、韓国大邱市^{テグ}サムドドン^{サムドドン}のマウルづくりという、住民主導で展開されている地域づくりを取り上げる。この運動を率先して担ってきた市民運動家のKさんは、運動の進展につれて、ある種の限界に直面せざるをえなくなった。すなわち、住民がなかなか運動にかかわってくれなかったため、マウルづくりが空回りしてしまったのである。先取りしていえば、本稿では、住民主導による地域づくりが、ある種のパターナリズムに陥ってしまうがゆえに直面する限界としてこの問題をとらえる。そしてそのうえで、その限界に直面した環境運動が、その限界を打開するためにどのような戦略をとることで、その限界を乗り越えるのかを明らかにする。そしてこのことは、地域の環境を創造しようとする環境運動において諸主体が「ともに」かかわることの難しさ、さらにはいかに「ともに」かかわることができるのかという可能性について考えることになるだろう。

2. 研究史と分析視角

2.1. 「ともに」かかわることの意味——「公論形成の場」に関する議論をもとに

ある地域にかかわる諸主体が「ともに」地域の環境を創造していくためには、いったいどのようにすればよいのか。この、地域社会における実践的な課題に対して有効な示唆を与えてくれる環境社会学の知見のひとつに「公論形成の場」(arena of public discourse)という概念(船橋, 1995 : 12-13, 1998 : 211)がある。船橋晴俊によると、環境問題の研究は(1)問題発生メカニズム論(加害論)、(2)被害論、(3)解決論という領域に分けることができる(船橋, 1995 : 5)が、ここで取り上げる「公論形成の場」とは、(3)の解決論に関する議論から生まれた概念である。公論形成とは「ある問題に関与する諸主体が、共通の情報に基づいて意見交換をし、問題の性格についての事実認識を深め、さまざまな解決策の優劣を検討し、価値基準や解決原則についての社会的合意の程度を高めること」(船橋, 1995 : 13)であり、環境問題を引き起こす、さまざまな社会的ジレンマの克服のためには、このような公論形成が必要であると指摘される(船橋, 1995 : 17)。また船橋は、別の論考で、「公論形成の場」を「公共圏の構成要素となるような個別具体的な、意見交換と意思表示の場」と定義したうえで、「公論形成の場にとって必要なことは、利害関係者に対する開放性であって、異質な視点・情報を集め、突き合わせた上で、より普遍性のある問題意識と解決策を見出すことである」とした(船橋, 1998 : 211)。

長谷川公一は、自治体職員と自由業的専門職層と生活者としての市民という、3者間の相互批判と相互交流、コラボレーションによる、新しい公共圏の創出の重要性を指摘し、その担い手と

松井：環境運動における戦略的パターナリズムの可能性

して環境運動を位置づけるが、彼が定義する「新しい公共圏」も、船橋の「公論形成の場」と非常に近い。それは、「価値観と利害を異にする問題の関与者が、理性的に議論しあい共通の接点を見出し、徐々に合意形成を積み重ねていけるような場と制度をつくりあげていくことが求められている」（長谷川，2003：224）という指摘からも明らかであろう。また、河川行政において住民との「協働」を実現するためには、住民の側に「対抗的専門性」や領域（分野）横断的で地域性を有したローカルな知のまとまりである「もうひとつの専門性」（帯谷，2004：292）が必要であるとする帯谷博明の議論も、いわゆる「公論形成の場」においてどうすれば住民が行政と対等な資格を得ることができるのか、ということに関する議論として位置づけられる。

これら「公論形成の場」に関する議論は、環境問題をめぐるコンフリクトにおいて環境にかかわる地元住民や一般市民の意思がまったく反映されない状況を危惧するなかで鍛えられたものであり、環境問題の解決論として非常に重要である。しかしながらその一方で、「公論形成の場」の設定によって問題が解決するわけではなく、その内実にこそ注目すべきであると主張する一連の研究がある。

脇田健一は、地域環境問題の解決に向けての合意形成を前提とした、地域住民と行政のコミュニケーション過程で、「状況の定義のズレ」が発生する可能性を指摘する。そして、滋賀県の石けん運動において、この「状況の定義のズレ」が実際に社会的な合意形成の障害となり、その結果運動が停滞していく過程を明らかにした（脇田，2001）。また、「長野県中信地区・廃棄物処理施設検討委員会」を事例として取り上げた土屋雄一郎は、手続き主義的な理念に支えられた民主的な討議の場で「住民の生活実感に根差した受苦の来歴」（土屋，2004：139）が排除された結果、住民のあいだに討議に対する失望感、不信感が広がっていったことを指摘した。そして、「プロセスにおける公正性が結果の不正を縮小するというよりも、制度的現実を肯定することになり得る」（土屋，2004：141）と結論づける。一方、具体的な「公論形成の場」を対象とした研究に、足立重和の研究が挙げられる（足立，2001）。足立は、長良川河口堰問題をめぐる行政側と反対派市民・住民の直接対話の場の会話データを用いてコミュニケーション論の視角から分析した。そこでは、行政側が「パターナリスティックなレトリック」（足立，2001：163）を用いることにより、対話を通じて行政と住民のあいだの「非対称性」が具現化してしまう。したがって、行政側と反対運動側は、ともに対話を求め、現に対話しているにもかかわらず、両者の対立は深まり、合意形成に到達することはできない。

これら一連の研究は、たとえ「公論形成の場」が設定されたとしても、それが必ずしもうまく機能するわけではないという現実を指摘している。確かに環境問題の解決を志向するならば、環境社会学はこのような現実にも向き合っていかなければならないだろう。

以上、「公論形成の場」の重要性を主張する研究と、それに対する懐疑的な研究を概観してきたが、このふたつの研究の流れを隔てているのは、いったい何であろうか。ここで、「現実話し合いによって、相互の良い論点を学びながら事が決着するのではなく、力関係によって決定する」（鳥越，1989：50）という鳥越皓之の指摘に着目したい。すなわち、社会問題の処理のされ方には、話し合いによって処理されるという考え方と力関係によって処理されるという考え方があがあるが、「公論形成の場」の重要性を主張する研究は前者の立場、それに対する懐疑的な研究は後者の立場といえるだろう。本稿ではあえて後者、つまり力関係によって社会問題が処理される

という立場をとる。なぜなら、本稿の事例からも明らかであるが、地域社会における環境運動の現場には、諸主体間の力関係を前提としたうえで環境運動を展開しなければならないという実践的課題が存在するからである。そのうえで、本稿では地域社会において諸主体が「ともに」かわるものの意味について論じる。

2.2. 環境運動におけるパターナリズムの問題

では、環境運動において諸主体間の力関係はどのように現れるのだろうか。本稿では、その現れの一例として、運動におけるパターナリズムを取り上げる。「社会運動の定義にもよるが、一般に、何らかの共通の『立場』にある人達が、自分達の行動様式や思考様式を変更しようとするとき、それが『他者』、つまり先の『立場』に該当しない人達をも巻き込むようなものでない限りは、彼らの活動は『社会運動』とはみなされない」（石川、1990：281）という石川准の指摘からも明らかであるように、社会運動は本質的に他の人びとへの広がり志向する。したがって、社会運動にかかわる人びとは基本的に「動員する側」と「動員される側」に分かれることとなり、両者のあいだには非対称な関係が生まれる。つまり、他の人びとを巻き込もうとするかぎりにおいて、社会運動は必然的にパターナリスティックな側面をもつことになるのである。

環境運動もその例外ではない。しかも、このパターナリズムが環境運動において障害となっていることも指摘されている。石けん運動という環境運動を事例とした脇田は、自己の外部にある社会的規範の力によって生じる「強制される変身」（脇田、1997：78）⁽¹⁾をともなうような運動のあり方が、運動の限界をもたらしめたことを明らかにした（脇田、1997）。本稿の議論に引きつけられれば、「自己の外部」に環境運動がつくりだす社会的規範が存在する場合、「外部の規範と自己との関係」として環境運動が成立するが、そこにはしばしば「動員する側」の「動員される側」に対するパターナリズムが内包されている。つまり、環境運動においても「構造化されたパターナリズム structural paternalism」（米本、1994：229；1995：108）の危険性が存在するのである。

以下、三徳洞のマウルづくりにおいて、この運動を率先して担ってきた市民運動家のKさんが直面した限界を、パターナリズムの問題として分析する。そして、Kさんがどのようにこのパターナリズムを乗り越えようとしたのかを明らかにすることによって、ある種の力関係を前提としつつも、諸主体が「ともに」環境運動にかかわりうる可能性を探りたい。

3. 三徳洞におけるマウルづくり

3.1. 韓国環境運動の展開とマウルづくり

「国家／資本と市民社会の関係の中で環境運動をとらえると、環境運動は生産領域を超えて生活の場で市民社会の自己決定権、生活の権利、生命、健康の権利を追求する運動であるといえる」（具度完、1996＝2001：267-68）と具度完が述べるように、現在、韓国における環境運動の舞台は、生産の場から生活の場へと移ってきている。このような環境運動の代表的なものとして、本稿で取り上げる「マウルづくり（마을만들기）」が挙げられよう。この、マウルづくりの「マ

松井：環境運動における戦略的パートナーリズムの可能性

ウル (마을)」という韓国語は、日本語に翻訳する際、一般的に「むら」と訳される。だが、鳥越も指摘するように、都市内の一定の地域をもさすことが多く、「英語の community ではなく日本語として使用する『コミュニティ』の意味に近い」(鳥越, 1994: 240-41)。また、韓国の社会学者金 賛 鎬^{キム チャン ホ}によるマウルづくりの定義をみても、マウルということばに対する見解は、鳥越とほぼ同様であることがわかる。金賛鎬は、マウルづくりについて次のように説明する。「『コミュニティデザイン』を翻訳しようとする『マウルづくり』になるだろう。『マウルづくり』という概念は、日本の『まちづくり』という用語が1990年代後半に韓国で翻訳されて定着したものだ。そして、以後韓国のいくつもの地域で、いろいろなかたちでマウルづくりが展開されてきた」⁽²⁾ (金賛鎬, 2002: 57)。

今まで環境は行政によって管理されてきたが、環境とは人びとの生活体験と歴史的な記憶が盛られる器であり、住民たちのコミュニケーションを通じて創造していかなければならない、と金賛鎬はマウルづくりの意義を述べる (金賛鎬, 2002: 168)。この背景には、1987年の民主化、1990年代から本格化した地方自治など、韓国の時代状況があることはいうまでもない。すなわち、近年韓国においても住民が地域づくりの担い手として登場し、そのひとつの現れとしてマウルづくりを理解することができるのである。

3.2. 事例地の概要

大邱広域市は韓 (朝鮮) 半島の東南地域である嶺南^{ヨンナム}地方の内陸中央に位置する都市で、ソウル特別市、釜山^{プサン}広域市に次ぐ、韓国第三の都市とされる。2004年に開通した高速鉄道を利用すれば、首都ソウルまで約1時間40分、釜山までは約58分の距離にある。本稿の事例地である大邱広域市中区三徳洞^{チュング}は、面積が0.64平方kmと、中区のなかでももっとも広い面積の洞⁽³⁾である。西から三徳洞1街、三徳洞2街、三徳洞3街と区画されていて、西は市中心部の商業地域とつながっており、東は住宅密集地域となっている。2003年12月31日現在の住民登録人口統計によると三徳洞の人口は5,843人、世帯数は2,506世帯で、12の統、75の班を構成している⁽⁴⁾。本稿で取り上げるマウルづくりの中心人物Kさんが住む三徳洞3街は、徒歩約10分で大邱広域市の中心部に出ることができる住宅街である。また、そのすぐ東には新 川^{シンチョン}という天井川が流れている。

三徳洞の歴史は、朝鮮時代蜜陽朴氏^{ミリヤン}がこの地域に定着してむらをつくったことにはじまる。当時、このむらには川、つまり新 川^{シンチョン}が流れており、また城の外に位置していたため、人びとはここを外串^{ウェゴッ} (外の岬という意味) と呼んでいた。そして、1914年から日本式の地名である三徳と呼ばれるようになる。日韓併合前から、大邱駅建設ブームによって大邱に定着しはじめた日本人は、韓国人が居住する旧市街である城内地域の東側に位置する、現在の三徳洞をはじめとする低湿地を埋め立てて住宅街を形成した。なお、このように植民地時代日本人によって開発された地域の区画は碁盤の目になっており、曲がりくねった道が多い旧市街と比べると、そのちがいは歴然としている。現在、都心地開発制限政策によって開発が制限されていること、また都心地から若干外れていることもあって、三徳洞をはじめとするこれらの地域では、開発があまり進んでいない。そのため、今でも植民地時代の道路や建築物がたくさん残っており⁽⁵⁾、当時の面影を残す地域となっている⁽⁶⁾。このように、植民地時代に寒村から高級住宅街となった三徳洞であったが、

植民地支配からの解放、韓国（朝鮮）戦争、そして軍事独裁政権下の高度経済成長、さらには民主化と時代を経るにつれ人口が郊外に流出していった結果、現在は庶民が住む古い住宅街という様相を呈している。高い塀、その上に鉄条網が張りめぐらされている住宅が多いのが印象的である。

3.3. 三徳洞におけるマウルづくりの概要⁽⁷⁾

三徳洞におけるマウルづくりの中心人物である市民運動家 K さんは、大邱出身の 1962 年生まれの男性で、ソウルにある延世^{ヨンセ}大学校で哲学を学ぶ。大学に通っていた当時、K さんも民主化を求める学生運動に参加していた。彼は、民主化運動から市民運動へという、韓国の市民運動の流れとともに歩む人物といえよう。現在、彼は大邱 YMCA⁽⁸⁾で働く一方、後述する「人間とマウル」という NGO の代表を務めている。

彼が三徳洞 3 街にある現在の自宅に引っ越してきたのは、1996 年 10 月頃であった。K さんの友人が借りて住んでいた、妻の父の家⁽⁹⁾を K さんが借りて住むというかたちをとっている。大学以来かかわり続けていた市民運動の経験にもとづいて、行政主導の地域づくりに住民たちがかかわることの難しさを痛感していた K さんは、行政主導の地域づくりに限界を感じていた。地域づくりの旗振り役が行政であることに、その原因があるのではないかと考えた K さんは、住民主導の地域づくりこそが現在求められている、という信念のもと、この三徳洞でマウルづくりという環境運動をおこないたいと考えるようになる。そして、98 年 11 月上旬、持ち主の許可を取り、なんと自宅の塀を崩した。植民地時代や高度経済成長期の面影を色濃く残すこの地域には、人びとが集う場所がなく索漠としているので、マウルづくりをはじめるとあって、まずは人びとが集える場所をつくらなければならない。そうすれば、地域の雰囲気も明るくなるのではないか。このように考えて塀を崩した、と K さんは言う⁽¹⁰⁾。もちろん、自宅の塀を崩すにあたり家族の反対もあったし、せっかく建てた塀をなぜ崩すのか、という近所の住民の陰口もあったようだ⁽¹¹⁾。

三徳洞では、K さんが働く大邱 YMCA と、K さんがマウルづくりのためにつくった「人間とマウル」⁽¹²⁾という NGO がマウルづくりを展開している。K さんをはじめとして、大邱 YMCA のメンバーと「人間とマウル」のメンバーは重なっていることが多く、所属に関係なく、約 15 名の NGO 職員が三徳洞におけるマウルづくりにかかわっていると考えればよいだろう。

K さんの自宅に併設されている 3 つの店舗（が入れるスペース）は、2004 年 10 月現在、大邱 YMCA の施設である「みどりのお店」というリサイクルショップ、近所の子どものための室内遊び場、そして「人間とマウル」の事務室として使われている。また、その向かい側には大邱 YMCA が運営する家出少年少女のための短期シェルターがある。さらに、そこから直線距離にして 150 m ほど離れた場所に、ひかり美術館（以下、美術館）という日本式家屋がある。これは、日本植民地時代に建てられ、三徳小学校の教員の住居として使われていた、教育庁所有の家屋である。これを、2000 年から大邱 YMCA が借り受け、三徳洞におけるマウルづくりの施設として運用している。そして、美術館の向かい側には、国楽院（国楽を演奏し、聴く場所という意味）がある。これは、以前食堂があった場所を、2001 年 K さんが個人的に買い取り、建物をリフォームした、伝統的な韓国式家屋である。美術館同様、国楽院もマウルづくりの施設として使

松井：環境運動における戦略的パターンナリズムの可能性

われていることはいうまでもない。また、国楽院と美術館はKさんの自宅同様塀は崩されており、近所の住民に対し文字どおり「開かれた」空間となっている。

マウルづくりに携わるNGOは、これらの場所で、次のような活動をおこなっている。まず、1年を通じておこなわれている主な活動として、リサイクルショップの運営が挙げられる。リサイクルショップはYMCAの職員1人とボランティアの近所の住民数人によって運営されている。ここでは、買い物をしに来たり、NGO職員やボランティア、さらにはそこに遊びに来ている人びととおしゃべりをするために来る住民を、多く見かけることができる。また、これらの場所で行事がおこなわれることも多い。定期的かつ三徳洞の住民に対して開かれる行事として、リサイクルショップのバザー会と、後述する「マウルジャンチ」⁽¹³⁾がある。バザー会はリサイクルショップとKさんの自宅付近でおこなわれ、「マウルジャンチ」は国楽院と美術館を中心として年に2回、春と秋におこなわれている。以上、NGOの活動内容の概観からわかるのは、三徳洞におけるマウルづくりとは、三徳洞の住民たちに「集う場所」を提供し、住民と「ともに」隣近所のあいだでわけへだてなくつきあう社会的な雰囲気をつくりだそうとする地域づくりである、ということだろう。

なお、最後に指摘しておかなければならないのは、これらの運動の予算についてである。マウルづくりの予算のほとんどは大邱YMCAのプロジェクト費から捻出されている。だが、Kさんの自宅の塀を崩す際にかかった費用をはじめ、国楽院の購入や維持・管理費などには、Kさんの私財が少なからず投じられている。

4. マウルづくりの行き詰まりとその打開に向けた試み

4.1. パターンナリズムの露呈と運動の限界

このように、地域づくりには住民主導の環境運動が必要であるとの信念のもと、Kさん個人が金銭的な負担をしてまで「集う場所」を提供したにもかかわらず、三徳洞の住民はなかなかその場所に来てはくれなかった。つまり、Kさんの思惑は外れてしまったのである。三徳洞のマウルづくりは、三徳洞の住民が「集う場所」を提供することによって、住民と「ともに」隣近所のあいだでわけへだてなくつきあう社会的な雰囲気をつくりだすことを目的としている。したがって、彼らが提供した「集う場所」に、実際に住民が来てくれないということは、まさに運動の行き詰まりを意味する。では、なぜ三徳洞のマウルづくりは行き詰ってしまったのだろうか。

ここで注目しなければならないのは、三徳洞のマウルづくりは「提供するNGO」と「その提供を受ける住民」という非対称性を前提としているふしがあることである。これは、Kさんの「自宅の塀を崩す」という行為にもよく現れている。マウルづくりを先導する市民運動家として自宅の塀を崩したKさんと、三徳洞の住民は、決して対等な存在ではない。Kさんはみずからの運動を住民主導の地域づくりと位置づけるかもしれないが、そこには「提供するKさん」と「その提供を受ける三徳洞の住民」という、パターンナリスティックな関係が成立する可能性が非常に高いのである。そしてそれは、NGOと住民のあいだに、ある種の力関係が存在することを意味する。

この、NGO と住民のあいだのパターナリスティックな関係は、住民をマウルづくりに巻き込む際、いったいどのようなかたちで障害となるのだろうか。三徳洞の住民がマウルづくり、つまり K さんを中心とする NGO の活動に、すんなりとコミットメントすることは、パターナリスティックな関係を甘受することにつながってしまう。というのも、住民が NGO の活動にコミットメントした瞬間、彼らはパターナリスティックな関係にもとづいて動員されてしまうからである。このことは、すなわち K さんをはじめとする NGO 職員を含め、三徳洞の人びとを「動員する側」と「動員される側」に隔ててしまうことを意味する。住民は、この居心地の悪さを気づいているからこそ、NGO が提供した「集う場所」に集わないのではないか。

三徳洞の住民が今も NGO との距離を慎重に取っていることから、このことはうかがえる。たとえば、国楽院で孫を遊ばせている住民は、「よく遊びに来るんですか」という筆者の問いかけに対し、次のように答える。「うちの孫が、ここで遊ぶんだと言って聞かないから来た」⁽¹⁴⁾。「この先生（NGO 職員のこと：筆者注）が親切で、うちの孫とも一緒に遊んでくれるから、申し訳ないと思いつつも、ついつい遊びに来てしまう」⁽¹⁵⁾。NGO が住民に集ってもらうために開放している場所であるにもかかわらず、彼らはまず、来た理由をわざわざ答えるのである。

けれども、K さんはこの事態を打開しようとする。みずから住民主導の地域づくりと位置づけた三徳洞のマウルづくりが、パターナリズムに陥ってしまうがゆえに直面した限界に気づいた後、彼はこの限界をどのように乗り越えようとしたのだろうか。

4.2. 運動の新たな展開——「マウルまつり」と「マウルジャンチ」

マウルづくりの一環として新しく塀を崩し創造した一連の「集う場所」で、K さんはみずからが所属する NGO とともに、年に 2 回、「マウルまつり」をおこなった。これは、NGO 側が主催して、公演などのさまざまな行事を企画し、地域の住民に参加してもらうことを目的とした行事である。しかしながら、K さんの住民主導の地域づくりの目論見に反して、そうした呼びかけに応じる者は少なかった。すなわち、近所の住民たちは、彼らの活動を「『あの人たちは何をやっているんだろう』と遠巻きに見ていた」⁽¹⁶⁾だけだったのである。普段これらの場所に人びとが入ってこないだけだったらまだしも、このような、三徳洞の住民に来てもらうための行事をおこなっても、人びとは来ない。こうして近所の人びとが来てくれることを望んだ K さんのマウルづくりは、人びとを呼び寄せることができず、行き詰まりをみせるのである。

地域の住民のために塀を崩し、みずから資金を集めてきて、行事まで開催したのに、人びとは来てくれない。どうしたらみんなが行事に参加してくれるのかを考えあぐねていた K さんは、ついに行事の内容そのものを変更してしまった。すなわち、「マウルまつり」を「マウルジャンチ」に変更したのである。K さんは言う。「最初はマウルまつりをしたのですが、何かが足りないようだったのです。だから、マウルジャンチに替えたんです。（中略）私がマウルづくりを試みたところ、人びとはジャンチを望んでいたのです」⁽¹⁷⁾。

「ジャンチ（잔치）」とは、「うたげ」あるいは「宴会」を意味する韓国の固有語で、「まつり（축제／祝祭）」とは明確に異なった意味をもつ。「マウルジャンチ」とは、地域の人びとが寄り集まって、共同で飲食することをいう。つまり、K さんは、これまでイベントが主、飲み食い従であった「マウルまつり」を逆転させて、飲み食いを主、イベントを従とした「マウルジャ

松井：環境運動における戦略的パターンナリズムの可能性

ンチ」に替えたのである。さらに K さんは、この新たな「マウルジャンチ」へのかかわり方までも変えてしまった。すなわち、K さんは運動そのものの中心から身を引くという選択をするに至ったのである。

では、いったいなぜ、K さんは「マウルまつり」を「マウルジャンチ」に置き換え、さらに身を引いたのであろうか。この K さんの行為の意味を、もう少し深く考えてみたい。

K さんが身を引いたことによって、「マウルジャンチ」という行事は実質的に主催する人がいなくなってしまった。だが K さんは、リサイクルショップでボランティアをする E さんと Y さんの 2 人⁽¹⁸⁾が中心となって、その後の「マウルジャンチ」を担ってくれることを期待していたのである。そしてそのことを通じて、「マウルジャンチ」、延いてはマウルづくりに参加する人びとに、変化があらわれることを期待したのである。

「マウルジャンチ」では、200 人を超える人びとが集まって飲食することが中心となる。当然、その料理の用意には大変な人手がかかる。しかし K さんは、「マウルジャンチ」をすることを宣言した後に、一切その準備にかかわろうとはしなかった。どうやら K さんだけでなく、リサイクルショップ担当の NGO 職員 M さんも、「マウルジャンチ」の準備をこの 2 人に任せようとしていたふしがある⁽¹⁹⁾。こうして大量の料理、そしてそれを料理してくれる人集めを結果的に任せられた 2 人は、これまでの「マウルまつり」でおこなってきたやり方（ボランティア募集）で人びとを集めていたらこの行事を切り盛りすることはできない、と考えたのである。

そこで代わりに 2 人がとった方法とは、リサイクルショップに来る常連のお客さんをはじめとした三徳洞の住民に、直接手伝いを頼み込む方法であった。つまり、E さんと Y さんが「マウルジャンチ」を手伝ってくれる人を集めるときに使ったのは、スーパーに向かう途中、リサイクルショップの前を通りがかった近所の人に声をかけたり、最近食堂をたたんだおばさんがリサイクルショップの前を偶然通りかかったときに、「料理ならこの人に頼めば百人力だ」と頼み込んで、手伝ってもらう、というやり方である。

この新たな方法を採用したことによって、「マウルジャンチ」の手伝いには多くの人びとが駆けつけてくれたと同時に、「マウルジャンチ」に集う人びとも、回数を重ねるごとに増えはじめたのである⁽²⁰⁾。2003 年 10 月 18 日におこなわれた「マウルジャンチ」には 300 人以上が集まり、用意した食べ物が足りないほどであった。このような賑わいは、運動の担い手が K さんから近所の主婦 2 人に移ったことがきっかけとなっている。それは、両者が主催する動員方法のちがいに起因する、人びとの運動の意味づけの相違から説明することができるだろう。

4.3. 「ボランティア的動員」と「つきあい関係の動員」

かつての「マウルまつり」の際は、K さんが常に中心に立ち、ボランティアを動員して運営する方法であった。しかし、そのときには、「マウルまつり」に人びとが集まることはなかった。なぜなら、近所の人びとは、催される行事が、K さんの意図が濃厚に反映されたものであることを知っており、それゆえ近所の人びとにとって、その行事に参加することは、マウルづくりという環境運動において「動員される側」として位置づけられること、すなわち NGO とのパターンナリスティックな関係に組み込まれてしまうことを意味していたからである。

なぜ、ボランティアとして人びとを動員すると、NGO と住民のあいだにパターンナリスティッ

クな関係が成立してしまうのだろうか。これを理解するためには、三徳洞のマウルづくりにおいて、ボランティアの動員がいったいどのようにおこなわれていたのかをきちんと理解する必要がある。そこで次に、そのしくみがもっともわかりやすいであろう、リサイクルショップにおけるボランティアの動員を具体的にみていく。

Kさんが三徳洞でマウルづくりをはじめた当初、リサイクルショップのボランティアは、次のように動員されていた。まず、NGOがボランティアを募集する。それに住民が応募する。そして、応募してきてくれた住民に対して、NGOがリサイクルショップでボランティアをするために必要とされる「教育」をほどこす。その教育を受けて、はじめて住民はリサイクルショップのボランティアとして働くことができる、というしくみである⁽²¹⁾。すなわち、住民がリサイクルショップのボランティアをするためには、あらかじめNGOから教育を受けなければならない、それは教育をする側、される側、すなわち「動員するNGO」と「動員される住民」というパターンリスティックな関係に組み込まれることを意味する。言い換えれば、このようなボランティアという動員方法が、地域社会における人びとの関係を、パターンリスティックな関係へと硬直させてしまう側面をもつのだ。

実は、当初12人いたリサイクルショップのボランティアであったが、現在、実質的にはEさんとYさんの2人しかいない。これは一見、ボランティア不足のように思えるが、Yさんはこの変化が必ずしもボランティア不足という困難ではないことを次のように示唆する。「いつものメンバーだけでは人数が足りなくて。近所の人たちの手伝いがなければ、バザー会もマウルジャンチもできないの。でも、ボランティアが少なくなって、最初はあまり手伝ってくれなかった近所の人たちが手伝ってくれるようになったんです」⁽²²⁾。EさんとYさんが周りの人びとを巻き込んでいく方法は、ボランティア募集とは明らかに質の異なるものであった。2人は「マウルジャンチ」を成功させるために、日ごろのつきあいの延長で周りの人びとに手伝いを頼み込んだ。包丁とまな板持参で手伝いにきてくれる人びとは、明らかに、それまでの「ボランティア募集」に応じてくれた人びとは質的に異なっていた。こうした2人がおこなったような、近隣における具体的な人間関係のあり方にもとづいた動員を、NGOがそれまでおこなってきた「ボランティア的動員」に対して、ここでは「つきあい関係の動員」と呼んでおきたい。「ボランティアの動員」とは「誰が来てくれてもいい」という開かれた側面をもつ一方、「来てくれれば誰でもいい」という動員対象の代替可能性や交換可能性を含意してしまう。しかし、「つきあい関係の動員」においては、その手伝いの内容から動員を求めていく人物は具体的であり、代替や交換は不可能で「あの人でないと」いけないものである。言い換えれば、2人が周りの人びとを「つきあい関係」から動員する場合、その動員は、日常生活の延長上でおこなわれるのである。リサイクルショップのボランティアを長く続ける彼女たちは、そこでさまざまな住民と接することを通じ、三徳洞における「つきあい関係」を築いてきた。だからこそ、彼女たちは「つきあい関係の動員」を実現できたのである。

5. 結 語

本稿でKさんの実践に注目するのは、彼が地域づくりのきっかけをつくりたいと考える一方で、その彼の活動が地域づくりの現場にパターナリスティックな関係を生じさせてしまうという困難な状況を乗り越えるために、彼がパターナリズムを相対化したうえで戦略的に利用した点である。

Kさんはみずからが先導する住民主導の地域づくりが運動の限界に直面したことを受けて、その原因がNGOと住民のあいだのパターナリスティックな関係にあると気づいた。だが彼は、このNGOと住民のあいだの力関係を無化することの困難をも知っていた。そこで、Kさんはマウルづくりから退いたのである。すなわち、Kさんは「動員する側」として運動のきっかけをつくり、みずからが運動の表舞台から身を引くことによって、この住民とのあいだのパターナリスティックな関係をなくし、運動のパターナリズムを乗り越え、諸主体が「ともに」かかわることのできる地域づくりを目指したのだ。この、運動のパターナリズムを相対化したうえで、戦略的に利用したKさんの試みを、本稿では「戦略的パターナリズム」と呼ぶ。

Kさんがマウルづくりからいなくなると、運動は変質を余儀なくされた。先述したように、その後を任されるかたちとなったEさんとYさんを中心として、マウルづくりにおける新たな関係が、三徳洞の住民のあいだに成立したのである。それは、住民と「ともに」隣近所のあいだでわけへだてなくつきあう社会的な雰囲気をつくりだそうとするKさんが望んでいた関係であった⁽²³⁾。この関係の変化の背景には、マウルづくりへの動員方法の転換が存在する。それは、以前のようなパターナリスティックな関係を前提とした「ボランティア的動員」から、日常生活の延長上におこなわれる「つきあい関係の動員」へ、とでもいえるような、動員の質的な転換であった。

では、なぜKさんはこのような運動のあり方を選んだのであろうか。それは、Kさんがマウルづくりを次のように考えていることからわかる。「実際これ（マウルづくり：筆者注）も、よい三徳洞をつくろう、という目標を掲げているわけではないでしょう。そうでしょう？ 実際これは、どうすればマウル単位で住民とコミュニケーションをとることができるのか、どうすれば住民たちをまとめることができるかを模索しているんじゃないですか」⁽²⁴⁾。彼はマウルづくりのような地域づくりを志向する環境運動は、地域住民と「ともに」おこなわなければならないことをはっきりと認識している。だからこそKさんは、住民との話し合いでは解決できないような力関係が三徳洞という地域社会に存在していても、それでも住民と「ともに」マウルづくりをおこなう道を選び、そして「戦略的パターナリズム」という試みを実践するに至ったのである。

運動のきっかけをつくりつつも運動のもつパターナリズムを乗り越えることを企図した、このKさんの試みは、運動が必然的に含みこんでしまうパターナリズムを、相対化したうえで利用する「戦略的パターナリズム」である。この「戦略的パターナリズム」は、環境運動を推し進める人びとと地域住民のあいだにある種の力関係が存在することを認めるがゆえに実現した試みであるといえよう。住民主導の環境運動が広範にみられる現代社会において、「戦略的パターナリズム」は、事例で挙げた韓国に限らず、運動のパターナリズムゆえに目的達成できない数々の取り組みに対して、さらには、話し合いのみでは乗り越えられないような、さまざまな問題を抱え

る地域社会で運動を展開せざるをえない数々の環境運動に対して、ひとつの有効な視座を提供できるのではないだろうか。

注

- (1) 別の論考で、脇田は「強制される運動」と言い換えている（脇田，2001：199）。
- (2) ただし、日本で「まちづくり」ということばが一般的に使われるのに対して、韓国では「マウル（あるいは、地域）づくり」ということばはあまり使われない（金賛鎬，2002：70）。
- (3) 洞とは、韓国の行政区域の名称である。大邱のような広域市（広域自治体）の場合、その下に自治区と郡（ともに基礎自治体）があり、そのなかでも自治区の下に洞（下部行政組織）が位置づけられている（日本環境会議・「アジア環境白書」編集委員会，2000：119）。
- (4) 大邱広域市中区三徳洞ホームページ（<http://gu.jung.daegu.kr/dong/samdeok/index.html>，2005.2.28）より。なお、統や班は韓国の住民組織の単位で、班が複数集まって、統を構成する。
- (5) たとえば、大邱広域市総合ボランティアセンターのパンフレット、「『小道は生きている』大邱小道文化 Image Map」によると、三徳洞には約30軒の日本式家屋が残っている。
- (6) 以上、街文化市民連帯共同調査チームによる『都市の美しさ 大邱だけがもつ美しい空間』を参考とした。
- (7) 以下の記述は主に、2003年8月26日～29日、10月14日～21日、2004年3月25日～4月3日、8月1日～10日、10月18日～22日の約40日間おこなったフィールドワーク、および2004年5月23日、6月6日におこなった元NGO職員に対する聞き取りにもとづく。
- (8) 周知のとおり、YMCA（Young Men's Christian Association）はキリスト教主義にもとづく国際的青年運動を展開する団体である。したがって、YMCAに所属する人びとが多くかかわっている三徳洞のマウルづくりにも、キリスト教の影響がみられることは予想される。しかしながら本稿では、三徳洞のマウルづくりとキリスト教の関係には立ち入らない。なぜなら、彼らがキリスト教を前面に出した活動を三徳洞でおこなうことはほとんどなく、むしろ彼らは、韓国の伝統を意識した活動をしているように見受けられるからである。
- (9) 1980年に建設された家屋。
- (10) 1996年より新たな緑地空間を造成することを目的に、公共施設の塀を取り払う施策が展開されていた大邱広域市では、Kさんが自宅の塀を崩したことが機縁となり、1999年には官民協力による「塀崩し運動」という市民運動が開始された。この塀崩し運動について書かれた日本語文献として、金奉キムボン暲（2002）、金奉暲・小浦（2001，2002）、趙汶授（2004）がある。金奉暲（2002）、金奉暲・小浦（2001，2002）は都市計画、あるいは環境デザインの観点から塀崩し運動にアプローチしており、趙汶授（2004）は「公私領域の重層性」をキーワードとして、塀崩し運動を社会学的に分析している。
- (11) 以上、Kさんによる文章（<http://www.fulssi.or.kr/book/4/b6.htm>，2005.2.28）と2003年8月28日のフィールド調査でのKさんの語り、そして2004年3月26日のフィールド調査での、三徳洞の住民Tさんの語りによる。
- (12) 2000年に設立されたNPOである。
- (13) とりあえず、ここではいったん「むらのうたげ」と直訳しておく。
- (14) 2004年3月27日のフィールド調査でのSさんの語り。
- (15) 2004年3月31日のフィールド調査でのNさんの語り。
- (16) 2003年10月21日のフィールド調査でのEさんの語り。
- (17) 2004年3月28日のフィールド調査でのKさんの語り。

松井：環境運動における戦略的パターナリズムの可能性

- (18) ^{テジョン}大田出身のEさんが結婚、出産を経てご主人の故郷である大邱に住むようになったのは1999年のことである。彼女はボランティアをはじめたきっかけを、リサイクルショップに客として来ていたときに、当時ボランティアをしていた主婦から勧誘されたから、と語る。また話を聞いた時点で、ボランティアをはじめてから3年半ほど経つ、と言っていた（2003年8月29日のフィールド調査でのEさんの語りより）。Yさんは地元、三徳洞の出身で、リサイクルショップでボランティアをはじめた時期は、Eさんとほぼ同時期である（2004年3月30日のフィールド調査でのYさんの語りより）。
- (19) 「マウルジャンチ」の準備を手伝ってくれる人びとを、いったいどのように集めているのか、という筆者の質問に対して、Mさんはこう答えた。「マウルジャンチのためにボランティアを募集するときにはEさんに言うの。そうすると、手伝ってくれとみんなに言うてくれるから」（2004年5月23日の聞き取り調査でのMさんの語りより）。
- (20) NGOとは疎遠な住民も「春と秋にはマウルジャンチがある。もうそろそろマウルジャンチの時期だが、今年は遅めだね。」「（国楽院や美術館に：筆者注）ふだんは行かないけれど、マウルジャンチのときは行く。」と筆者に語ってくれる。
- (21) 以上、注(11)に既出のホームページを参照した。
- (22) 2004年10月19日のフィールド調査でのYさんの語り。
- (23) ここで注意しなければならないのは、Kさんは三徳洞の住民に対し、運動の集合的アイデンティティの獲得を求めている、ということである。そうではなく、彼はマウルづくりという環境運動を通じて、三徳洞の住民の関係が変化することを求めているのである。
- (24) 2004年10月21日のフィールド調査でのKさんの語り。

文献

- 足立重和, 2001, 「公共事業をめぐる対話のメカニズム——長良川河口堰問題を事例として」 船橋晴俊編『加害・被害と解決過程』（講座環境社会学 第2巻）, 有斐閣：145-76.
- 船橋晴俊, 1995, 「環境問題への社会学的視座——『社会的ジレンマ論』と『社会制御システム論』」『環境社会学研究』1：5-20.
- , 1998, 「環境問題の未来と社会変動——社会の自己破壊性と自己組織性」 船橋晴俊・飯島伸子編『環境』（講座社会学 12）, 東京大学出版会：191-224.
- 長谷川公一, 2003, 『環境運動と新しい公共圏——環境社会学のパースペクティブ』有斐閣.
- 今西一男, 1998, 「住民運動による普遍的公共性の構築」『社会学評論』49（2）：221-37.
- 石川准, 1990, 「自助グループ運動から他者を巻き込む運動へ——ある障害者グループの活動から」社会運動論研究会『社会運動論の統合をめざして——理論と分析』成文堂, 281-311.
- 趙汝授, 2004, 「『まちづくり』における公私領域の重層性——韓国大邱市の『塀崩し運動』を事例にして」東京大学大学院人文社会系研究科2004年度修士論文.
- 金奉暻, 2002, 「敷地内空地の開放が生活空間に及ぼす効果に関する研究——韓国テグ市における塀崩し運動を事例として」大阪大学大学院工学研究科平成13年度修士論文.
- 金奉暻・小浦久子, 2001, 「敷地内空地の開放が生活空間に及ぼす効果に関する研究——韓国テグ市における塀崩し運動を事例として」『日本都市計画学会関西支部10周年記念論文集』19-24.
- , 2002, 「敷き際の開放によるマダンの変容と生活空間に及ぼす効果に関する研究——韓国テグ市における塀崩し運動を事例として」『日本都市計画学会学術研究論文集』37：1117-122.
- 金賛鎬, 2002, 『都市はメディアだ』本の世界（韓国語）.
- 具度完, 1996=2001, 石坂浩一・福島みのり訳『韓国環境運動の社会学——正義に基づく持続可能な社会のために』法政大学出版局.
- 日本環境会議・「アジア環境白書」編集委員会, 2000, 『アジア環境白書2000/01』東洋経済新報社.

- 帯谷博明, 2004, 『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生——対立と協働のダイナミズム』昭和堂.
- 高田昭彦, 2001, 「環境 NPO と NPO 段階の市民運動——日本における環境運動の現在」長谷川公一編『環境運動と政策のダイナミズム』(講座環境社会学 4), 有斐閣: 147-78.
- 鳥越皓之, 1989, 「経験と生活環境主義」『環境問題の社会理論——生活環境主義の立場から』御茶の水書房: 14-53.
- , 1994, 『地域自治会の研究——部落会・町内会・自治会の展開過程』ミネルヴァ書房.
- , 1997, 『環境社会学の理論と実践——生活環境主義の立場から』有斐閣.
- 土屋雄一郎, 2004, 「公論形成の場における手続きと結果の相互承認——長野県中信地区廃棄物処理施設検討委員会を事例に」『環境社会学研究』10: 131-44.
- 脇田健一, 1997, 「変身する主婦」宮原浩二郎・荻野昌弘『変身の社会学』世界思想社: 57-86.
- , 2001, 「地域環境問題をめぐる“状況の定義のズレ”と“社会的コンテキスト”——滋賀県における石けん運動をもとに」船橋晴俊編『加害・被害と解決過程』(講座環境社会学 第2巻), 有斐閣: 177-206.
- 米本昌平, 1994, 『地球環境問題とは何か』岩波新書.
- , 1995, 「地球環境問題と社会学の再生」『環境社会学研究』1: 107-10.
- 大邱広域市 大邱観光案内地図 (日本語).
- 大邱広域市総合ボランティアセンター, 2004, 「『小道は生きている』大邱小道文化 Image Map」(韓国語).
- 街文化市民連帯共同調査チーム『都市の美しさ 大邱だけがもつ美しい空間』(韓国語).

(まつい・りえ)